

西朋

19

1979

西朋登高会

— 目 次 —

卷 頭 言	会長 平 木 桂 太	3
山 行 総 覧		4
山を求めて人に会ったこと	渡辺 喜仁 (21期)	11
YUKON SUMMER OF '78	遠藤 彰 (26期)	12
自 業 自 得	林 武志 (6期)	16
山 行 報 告		18
1973年度		18
1974年度		19
1975年度		26
1976年度		32
1977年度		38
1978年度		57
会 員 名 簿		77



巻 頭 言

会長 平 木 桂 太

社会人の山岳団体は設立の目的とその経緯によって、それぞれ様々な性格をもっている。わが西朋登高会を振りかえってみるに、目的とするところは「スポーツアルピニズム」という言葉で表現されるところのものであり、これは何も当会の特色と言えるものではない。ここでテーマとしたいのは、むしろ会の成り立ちについてである。わが会は上記の目的のために同じ高校の山岳部（後にワンダーフォーゲル部）出身者のうちの有志が作っているものである。この種の会が長続きし、発展する根本は、自分が先輩から受けたものを後輩に伝えて行こうという気持である。それは精神的なものであり、或いは、知的なものであろう。ところで現実をとらえてみるに、社会人となりある程度の社会的地位になれば、特殊な例外はあるが一般的には山に行くことが難しくなる。なまじっか学生時代に相当な山行をしてきたが故に、身体には軽い山歩き程度が適当なのにも拘らず頭は以前の大きな山行を考えて、かえって何もしないで終っているというのが中年社会人会員の姿であろう。それはさておき、学生会員と同一の行動をとることは所詮無理なので、それでは如何に会の実働部隊をバックアップするかが問題となるのである。自分が山に行っていた時期にバックアップされていた者は、次の時代には如何にそれを後輩に返して行くか。ということが重要なのである。恩恵を受けるだけでは会全体の発展は望めない。当会に限っても、学生時代には相当な活躍をしていながら音信不通、或いは往復ハガキの返事も寄こさぬ会員がいるのは、それぞれ理由はあろうが会の発展という観点からはその力を活かしていないという意味でもったいないことである。会員は毎年ふえて行く。最近の新人は古手会員の子供くらの年齢になってきた。この問題は年を追って大きくなって行こう。このあたりで具体的な解決法としての行動を起こさねばなるまい。

話題変わって、いざという時の備えについて述べたい。最近の西朋登高会の山行にはめざましいものがあり、以前の当会では難しいかなと思われていたことも今では容易に成し遂げられていることもある。これも会としての蓄積に負うところ大であるが、当然のことながら危険も同時にその度が高まっている。それを極力回避せねばならないのは論をまたないが、遭難時の即座の対応が西朋の現状ではこころもとないことを指摘したい。お金ではない。遭難対策基金もあるし、費用などはなんとでもなる。問題はすぐ出動体制がとれるかである。連絡体制、個人装、まともな団体装の予備、いずれをとっても完全とはいえない。個人装などは「後輩の便宜に供する為に」貸したものがいつの間にか行方不明、というケースが多い。これなどは前項で述べたことが、不完全なかたちで行われたがゆえである。

以上述べた如く西朋には課題が多い。これらは誰かひとりが頑張ってもダメで、やはり会員一人ひとりが問題意識をもつことが、解決のみちだと考える。

山 行 総 覧 (73~78)

1973年度

月 日	山 行 名	参 加 者	ページ
6/15~ 17	中央アルプス 木曾駒-宝剣-空木	入戸野, 渡辺, 山田, 住山	18
7/19~ 31	北海道中央高地 富良黒岳-十勝岳-忠別岳-旭岳 及び利尻山	入戸野, 渡辺, 山田	
7/23~ 8/1	黒部上ノ廊下	伊東, 中村, 渡辺	
9/22~ 24	鳳凰三山	渡辺, 山田	
10/13~ 15	北岳バットレス・千尾根-中央稜	平木, 岡田, 山野, 中村, 渡辺	
10/29~ 31	谷川岳-ノ倉沢 烏帽子岩奥壁, 変形チムニー	中村, 渡辺	
11/13~ 14	大善薩牛ノ寝通り	渡辺, 山田	
12/23~ 27	穂高縦走・西穂-槍 (失敗)	伊東, 渡辺	
12/28~ 31	八ヶ岳 小同心クラック, ジョウゴ沢	山野, 中村	
2/3	丹沢表尾根	渡辺, 山田	
2/17~ 26	樽 池	渡辺, 伊東, 西井	

1974年度

月 日	山 行 名	参 加 者	ページ
5/2~ 6	会津駒ヶ岳-尾瀬スキーツアー	入戸野, 渡辺, 山田, 山成, 宮崎, 山野	18
6/1~ 2	飯盛山	入戸野, 渡辺, 山田, 山成, 住山, 宮崎, 岩崎	
6/1~ 3	谷川岳・一ノ倉沢衝立岩中央稜・マ チガ沢東南稜	渡辺, 吉田, 久米, 森下	
6/10~ 9/3	カラコルム	渡辺 他 早大関係3名	
6/14~ 16	谷川連峰 谷川-仙ノ倉-平標-三国峠	渡辺, 山田, 山成, 宮崎 渡辺, 山田, 山成, 宮崎	
6/30	三ツ峠岩登り	山野, 中村, 入戸野, 岩崎, 山田,	

7/21~ 28	北 ア 烏帽子-雲ノ平-上高地	宮崎兄弟, 西井, 吉田, 久米, 森下 渡辺, 山田, 山成, 岩崎, 宮崎	
7/24~ 8/2	針の木峠-涸沢	吉田, 久米, 森下	
8/4~ 8	涸沢定着	吉田, 久米, 森下	
10/18~ 20	谷川岳, 赤谷川, 本谷	渡辺, 吉田, 久米, 森下	1 9
10/28	日和田山岩登り	吉田, 宮崎, 久米, 森下	
10/31~11/5	槍ヶ岳北鎌尾根-表銀座	渡辺, 吉田, 西井, 森下	
11/29	三ッ峠岩登り	渡辺, 吉田, 久米, 森下	
12/16~ 23	爺ヶ岳東尾根-鹿島槍	渡辺, 吉田, 久米, 森下	2 1
2/11~ 12	阿弥陀岳南稜	渡辺, 久米, 森下	2 2
3/1~ 5	鋸岳-甲斐駒	渡辺, 吉田	
3/17~ 24	荒川三山-赤石岳-大沢岳	渡辺, 久米, 森下	2 3

1975年度

月 日	山 行 名	参 加 者	ページ
4/29	北秩父双子山岩登り	吉田, 森下	
5/3~ 4	北岳雪訓	渡辺, 吉田, 久米, 森下, 中尾, 広瀬	
5/3~ 6	北ア・蝶ヶ岳-長堀山	宮崎, 渡辺, 大和田, 榎本	
5/25	三ッ峠岩登り	中村, 吉田, 森下	
6/6~ 8	谷川岳	渡辺, 吉田, 久米, 森下, 中尾, 広瀬	
6/21~ 22	三ッ峠岩登り	吉田, 森下	
7/25~ 31	黒部東沢-雲の平-立山連峰 太郎より	久米, 森下, 中尾, 広瀬, 大和田, 榎本	2 6 2 8
8/1~ 9	剣定着	上隊に加え 山野, 渡辺, 吉田	
8/25~ 28	谷川岳-ノ倉沢 烏帽子奥壁中央カンテルート~ 逢峠	吉田, 森下	2 9
9/23~ 24	谷川岳-ノ倉沢 衝立岩正面壁ダイレクトカンテ 烏帽子岩南稜	中村, 森下, 伊東, 中尾 (中村, 森下) (伊東, 中尾)	2 9 2 9
10/18~ 21	谷川岳, 幽ノ沢V状岩壁右ルート	渡辺, 吉田, 森下, 中尾	

11/23~ 24	八海山	中村, 森下, 久米, 中尾	
12/25~ 1/2	遠見尾根-五竜岳-磨松岳	渡辺, 森下, 中尾	30
3/15~ 22	剣岳早月尾根	渡辺, 森下, 中尾	31

1976年度

月 日	山 行 名	参 加 者	ページ
4/21	日和田山	森下, 中尾, 遠藤, 角田, 東野, 松本	
5/1~ 5	谷川岳 新人合宿		
5/29~ 30	三ツ峠	山野, 中村, 森下, 中尾, 遠藤, 角田, 東野, 松本, 世利	
6/18~ 20	谷川岳 オジカ沢-一ノ倉沢南稜 一ノ倉沢, 滝沢下部ダイレクト- 本谷	森下, 中尾, 松本 (森下, 中尾, 松本) (森下, 中尾)	32
7/26~ 8/11	夏山合宿 北アルプス 黒薙川, 北又谷-五竜岳 滝谷第一尾根 クラック尾根 ドーム中央稜 第四尾根 ダイヤモンドフェース 本庄山の会ルート-ドーム西壁	上遠野, 山野, 渡辺, 中村, 伊東, 西井, 森下, 中尾, 遠藤, 角田, 松本, 世利 (森下, 中尾, 遠藤, 角田, 松本) (森下, 松本) (山野, 東野) (上遠野, 遠藤) (中尾, 角田) (西井, 角田) (渡辺, 東野) (中村, 世利) (中尾, 遠藤) (山野, 松本) (森下, 世利) (山野, 松本) (森下, 中尾)	33
9/2	谷川岳-一ノ倉沢2の沢 (敗退)	森下, 松本, 世利	
9/19	谷川岳-一ノ倉沢滝沢第3スラブ (敗退)	森下, 中尾	
10/10~ 11	谷川岳-一ノ倉沢2の沢 (敗退)	伊東, 森下, 中尾, 遠藤, 東野, 松本	
10/31~ 11/5	槍ヶ岳北鎌尾根-奥穂-天狗のコル	森下, 中尾, 遠藤, 東野, 松本, 世利	

12/28~1/3	燕岳-常念-蝶ヶ岳	渡辺, 中尾, 遠藤, 松本, 世利	3 5
2/28~3/6	五竜岳-鹿島槍ヶ岳	森下, 中尾, 遠藤, 松本, 世利	3 6

1977年度

月 日	山 行 名	参 加 者	ページ
4/12	三ツ峠	森下, 中尾, 松本	
4/20	日和田山 新人訓練	森下, 中尾, 遠藤彰, 松本, 東野, 伊東, 青谷, 中野, 宮崎, 桑原, 菊谷	
4/29~5/3	谷川岳 新人合宿	川田, 上遠野, 山野, 中村, 水口, 伊東, 入戸野, 吉田, 森下, 久米, 中尾, 遠藤彰, 松本, 世利, 伊東, 遠藤信行, 中野, 青谷	3 8
5/20~ 22	一ノ倉沢烏帽子岩奥壁凹状岩壁 谷川岳	(吉田, 森下) 森下, 中尾, 遠藤彰, 松本, 東野, 伊東, 青谷, 中野	
	滝沢第3スラブ	(森下, 中尾)	
	烏帽子岩南稜	(東野, 松本)	
6/3~ 5	燕岳-常念-蝶ヶ岳	入戸野, 宮崎, 桑原, 菊谷	3 9
6/4~ 5	三ツ峠	遠藤彰, 松本, 遠藤信行, 青谷, 中野	
6/11~ 14	甲斐駒-赤石沢奥壁中央稜	森下, 中尾, 遠藤彰	
7/28~8/13	夏山合宿	山野, 森下, 中尾, 遠藤彰, 松本, 世利, 伊東, 遠藤信行, 青谷, 中野	4 0
	双六谷-黒部川上ノ廊下下降	(中尾, 遠藤彰, 松本, 世利, 伊東, 遠藤信行, 青谷, 中野)	4 0
	滝谷-尾根	(森下, 遠藤信行)(松本, 中野)	
	P2フランク 早大ルート	(中尾, 遠藤信行)(森下, 中野)	
	P2フランク ジェードルルート	(中尾, 遠藤彰)	4 2
	ダイヤモンドフェース 清水山岳会 ルート	(遠藤彰, 伊東) (松本, 青谷)	
	ドーム中央稜	(中尾, 遠藤信行)(松本 青谷) (遠藤彰, 伊東)	

	四尾根	(中尾, 伊東) (遠藤彰, 青谷)	
	ツルム正面壁	(森下, 松本)	4 2
	前穂東壁 Dフェース, 田山ルート	(森下, 松本)	4 4
	北尾根四峰正面壁 北条・新村ルート	(中尾, 遠藤彰)	4 3
	屏風岩 雲稜ルート	(遠藤彰, 松本)	4 4
	・ 東稜	(森下, 中尾)	4 5
7/28~8/4	黒部川東沢-高天原-薬師岳- 五色ヶ原	宮崎, 糸原, 菊谷	
8/27~ 28	利尻岳	中尾, 遠藤彰	
8/28~ 31	甲斐駒 黄蓮谷右俣	森下, 松本	4 5
9/23~ 25	谷川岳	森下, 中尾, 遠藤彰, 松本	4 7
	衝立岩正面壁雲稜会ルート	(森下, 中尾)	4 7
	幽ノ沢中央壁正面フェース	(遠藤彰, 松本)	4 8
	一ノ倉沢 三ルンゼ	(遠藤彰, 松本)	4 9
10/1~ 2	谷川岳ヒツゴー沢, タカノスC沢	松本, 伊東, 青谷	4 9
10/8~ 10	谷川岳		
	烏帽子奥壁変形チムニー	(遠藤彰, 松本)	5 0
	一ノ倉沢 二ルンゼーBルンゼ	(中尾, 伊東, 中村)	5 0
10/29~11/2	明星山		5 1
	墓石稜	(中尾, 青谷) (遠藤彰, 中野)	
	P5ドーム ルンゼ状壁	(中尾, 青谷)	5 1
	P6東稜	(遠藤彰, 遠藤信行) (中尾, 青谷, 中野)	
	P6南壁左フェース	(遠藤彰, 遠藤信行) (中尾, 青谷)	5 2
12/26~ 30	冬山合宿 北岳	中尾, 遠藤彰, 伊東, 遠藤信行 青谷, 中野	5 3
1/15~ 16	雲取山	糸原, 菊谷	
2/11~ 15	八ヶ丘	遠藤彰, 青谷	
	横岳西壁石尊稜-小同心クラック		
2/22	日和田山	森下, 中尾, 松本, 青谷	
2/24~ 29	八ヶ岳, 赤岳主稜, 大同心南稜	森下, 中尾, 松本	
3/18~ 21	鳳凰三山	宮崎, 菊谷, 糸原	
3/28~4/7	仙丈岳-塩見岳-荒川岳-転付峠	遠藤彰, 松本, 世利, 伊東, 青谷, 中野	5 4

1978年度

月 日	山 行 名	参 加 者	ページ
4/23	武甲山暮岩	森下, 中尾, 松本, 遠藤信行, 青谷	
4/26	日和田山	遠藤彰, 松本, 伊東, 岡田, 宇佐美	
4/29~5/4	穂高岳明神東稜, 下又白谷菱形岩壁 (共に敗退)	渡辺, 森下, 中尾, 遠藤信行	57
5/3~7	北 岳	山野, 遠藤彰, 松本, 青谷, 中野, 象原, 岡田	58
	ピラミッドフェース	(松本, 青谷)	59
	第四尾根下部フランケ	(遠藤, 中野)	
	第一尾根正面壁	(遠藤, 中野)	
	第四尾根	(松本, 青谷, 岡田)	
6/10	谷川岳滝沢右岩稜-Bルンゼ	遠藤彰, 松本	59
6/17~18	三ツ峠	中尾, 松本, 中野, 象原, 岡田	
6/18	谷川岳 コップ状左岩壁 (敗退)	森下, 青谷	
7/25~8/12	夏山合宿	森下, 中尾, 松本, 遠藤信行, 青谷, 中野, 宇佐美, 岡田	60
	黒薙川柳又谷	(森下, 中尾, 松本, 中野, 宇佐美)	60
	剣岳源治郎, 二峰, Cフェース	(青谷, 岡田)	
	八ツ峰, 六峰, Aフェース	(青谷, 岡田)	
	" Cフェース	(松本, 遠藤, 宇佐美)	
	" Dフェース	(中野, 岡田)	
	八ツ峰 四峰 長次郎側フェース	(中尾, 青谷) (中野, 宇佐美)	
	" マイナーピーク側壁	(森下, 岡田)	
	(途中まで)		
	" マイナーピーク東面スラブ	(森下, 中野)	
	源治郎一峰 下部中央ルンゼ-上	(青谷, 宇佐美)	
	部成城大ルート	(森下, 青谷)	61
	源治郎一峰 下部中谷ルート	(松本, 遠藤)	63
	チンネ 左稜線	(松本, 宇佐美) (遠藤, 中野)	

	チンネ 左下カンテ-左方カンテ	(中尾, 遠藤)	6 2
	池の谷中央ルンゼ	(松本, 青谷)	6 4
	丸山東壁緑ルート	(森下, 松本)	6 4
7/21~8/30	アラスカ		1 1
	St. Elias 山群, Mt. Queen Mary	渡辺, 遠藤彰, 児玉 (稲門山岳会)	
8/13~8/19	北ア 薬師岳-双六岳	象原, 小島 (西高)	
8/23	谷川岳 衝立岩ダイレクトカンテ (敗退)	松本, 青谷	
9/23~ 24	巻機山 五十沢川下の滝沢	中尾, 松本, 遠藤信行	6 5
10/14	越沢バットレス	森下, 中尾, 遠藤彰	
10/19~ 22	甲斐駒 赤石沢-ダイヤモンドフランケ A	森下, 遠藤	6 6
11/3 ~ 5	越後三山縦走	中尾, 松本, 中野	6 7
11/3 ~ 5	奥秩父 甲武信-雁坂-雁峠	象原, 菊谷, 菊地	
11/23~ 26	西上州叶山 ビルディングフェイス右岩稜 (敗退) - 八倉峠-鹿岳	森下, 青谷	6 8
12/21~ 31	冬山合宿 甲斐駒ヶ岳 鋸岳-甲斐駒縦走 摩利支天南山稜 中央壁独標ルート 戸台川本谷	山野, 森下, 遠藤彰, 松本, 青谷, 中野 (山野, 遠藤彰, 松本, 青谷) (松本, 青谷) (遠藤, 中野) (森下, 青谷) (森下, 遠藤, 松本, 中野)	6 9 6 9 7 0 7 0 7 1
2/18~ 21	八ッ岳 広河原沢三ルンゼ-阿弥陀岳 北西稜	松本, 青谷	7 2
3/3 ~ 8	中央アルプス 木曾駒-空木岳-念丈岳	遠藤彰, 青谷, 中野, 岡田 (宝剣岳まで) 山野, 松本	7 4
3/21~ 24	南 ア 摩利支天サデの大岩		7 5 7 5

山を求めて人に出会ったこと

渡 辺 喜 仁 (21期)

小型機から、ハッバード氷河に降りた。岩と雪の織りなす無機質の世界は、日常の見なれた美しさを超越して、私に迫って来た。すべてが結晶化され、太陽の光さえ凍てついている。時間は、遙か太古に動きを静止してしまっている。すると、どこからか羽音が伝わって来た。見やると牛肉にハエが二ひきたかっているのだ。私達と一緒に小型機で運ばれて来たものか、牛肉のにおいに魅せられて、100kmの氷河上を飛翔して来たものか。とりつくひまのない冷徹な人の横顔におくれ毛を見出ししたように、急にこの光景が、親しいものに思われだした。数日を経て、この一見無機質の世界にも虫がとび、小さな花が咲き、貧弱ながらも生物的世界が息づいているのを発見できた。

アラスカからカナダに広がる自然の雄大さ・奥行きは、私の予想を越えて、遙かに素晴らしかった。しかし、今は、それに触れることは、差し控えよう、言葉を費やすよりも一枚の写真の方が、より雄弁にそれを伝えてくれるであろうから。むしろ、ここでは、当初、ほとんど予想もしなかった人との出会いについて書き留めたい。

ヘインズジャンクションをバスで立つ時、車で私達の荷物をバス停まで送ってくれたホテルの使用人(西部劇で酒場にたむろする一人を連想されたい)から、こう問われた。「またいつか、この地にもどってくるかね。」「ああ、ぜひやって来たい。素晴らしい山だった。それにみんな親切だった。」その通りであった。この一夏の私達の登山が充実して過ごせたのは、多くの人達との出会いがあったおかげであった。

アンカレジのジャクソン氏と小笠原氏。快く私達に宿と情報を提供してくれた。おかげで、スムーズに買い出しなどの準備もできたのである。

フェアバンクスからのバスで乗りあわせたA女史。以前日本でYMCAの仕事をしていたこともあるという。クルアーネで、登山を終えたフランス隊が乗りあわせた時、狭いバス内で、フランス語から英語の通訳をしてくれ、下山ルートの情報を得ることができた。ニューヨークへ帰ると言う。

名前は聞き忘れたが、クルアーネ国立公園の監督官。私達の登山隊は、規定の4人に1人、欠けていた。日本を立つ前の、一番不安なことであり、登山が不許可になってもしょうがなかったわけである。しかし、よく私達のために骨を折ってくださり、登山を許可しアドバイスを授けてくれた。登山を終え、国立公園の事務所に赴くと、大きい手でがっちり握手してくれた。「よくやった。いい登山だったかね。」私達が、事故を起こしたりしていたら、この人に多大な迷惑が及んだはずであった。その包容力に感謝している。

登山を終え、アラスカハイウェイに夜遅くたどりついた私達をエアストリップまで車で運ん

でくれた人達、そこで食事を出し、ロッジを提供してくれた人達……。 「お金はいらないよ。親切にするのは当たり前のことだもの。」 ユーコンエアウェイズのフィル＝ウプトン飛行士やアンディー＝ウィリアムス氏。 「飛行機代や、無線機代は、山が終われば、払ってくればいいさ。」 その間に、契約書が介在することもなく、人と人との信頼の上に成立している世界であった。 雨の中で、バスを待つ私達に気を使ってくれたのもウプトン飛行士であり、いろんな登山の話の聞かせてくれた。 もう初老にはいった、長身でやや赤ら顔のこの飛行士は、この地域の登山の生き字引きであろう。

ヘインズジャンクションのホテル（民宿と言った感じ）、ブリュースターのボス。 腹がつき出て、耳が遠いのだが「国立公園の事務所へ行くって。うちの車を使いな。運転士つきだよ。金なんていらん。」 両手を大きく広げて、ノーと言われた。 コンサイスの英和辞典にサインを求められた。ここに逗留した日本人のサインが、書き連らねられていた。

ホワイトホースまで、ヒッチハイクさせてくれた建築技師、帰路の陽気なインディアンたち。 私達の前に、カスカウルシュ氷河にはいった登山者やバックパッカーたち。 その踏み跡は、私達の下山の際の明確な道しるべであった。 しかも、ゴミは一切捨てられていないのだ。 人の足跡にまじって、グリズリーやムースが交差していたが。

40日に満たぬ登山と旅行であったが、私の今後の生き方に多くの示唆を投げかけてくれたのだ。 アラスカ・カナダの自然に対する興味以上に人に対する信頼感を得られたのは、一番の収穫であったように思う。 You are in Grizzly country.



YUKON, SUMMER OF '78

遠藤 彰 (26期)

うつくしいもの

わたしみずからのなかでもいい

わたしの外の せかいでもいい

どこにか「ほんとうに 美しいもの」はないのか

それが 敵であっても かまわない

及びがたくても よい

ただ 在るということが 分りさえすれば

ああひさしくも これを追うに つかれたところ

去年(1978年)の夏、アラスカの山の中で、この八木重吉の詩を、思い出していた。そ

れは、とうてい、及びがたいものではあった。けれども、とうとう見つけた。ああ、やっぱりあったんだなあ……生きていることに喜びを見出すことができただけでも、やってきてよかった。

ただ、くやしいのは、ぼくの貧しさ!!それを表現する術を持たない。

ここまではこの春にぼくが作って「彷徨の後で」と題したささやかな手製画文集の一節である。ぼくの心境はこのとおりなので、ほんとうはもうこれ以上は書けない。ただこの本は公表するつもりで作ったのではないし、他の文や絵との配列などをぼくなり考えて作ったものなので、この一節だけではあまり意味がない。それにもうぼくの手もとを離れてしまっている。もともとそのつもりで作ったものだったのだから……今は「西朋」用に拙い文を書く努力をしよう。

去年の夏、ぼくは渡辺喜仁さんと児玉茂さん（稲門山岳会、渡辺さんの早大山岳部時代からのお友達）が以前から計画していたアラスカ行に同行させてもらった。約40日間アラスカ、ユーコンに滞在し、St. Elias山群のMt. Queen Mary（3880m）の登頂と、Kaskawulsh氷河のスキー・アウトをすることができた。山の中には3週間入っていたが、この記録は児玉さんによって50ページの「YUKON '78」としてまとめられている。そこで今はぼくの感想とぼくにとってのアラスカ以降について書こうと思う。

アラスカはアメリカ人が自らラストフロンティアと呼ぶほどであるから、広い合衆国の中でも最も雄大な自然が残されているようだ。そのすばらしさはいまさら言うまでもないが、むしろそれを守ってゆこうとする姿勢もまた残念ながら日本の比ではない。石油のパイプラインや国立公園の開発には、何回も公聴会が開かれたり、計画案や報告書が出されそれらはすぐ手に入れることができる。自然は残っているのではなく、残されているというわけだ。もっとも米国の自然保護は日本以上の汚染や乱開発の反省から始まったといってしまうとそれまでだが。いわばそういう養沢も許される国であるというべきなのだろうか。しかしそういうふうに考えた上でもなお、アラスカの自然はすばらしいものである。ましてヤマッキンレー周辺など極く一部を除けば、一年間にせいぜい十数人しか歩かないであろう氷河や文字通り人跡未踏の山々は無数にある。まさに“フロンティア”だ。

広い大地に点在する街、そこで夏の旅行者として生活することはそれほど異和感がない。日本の生活がアメリカナイズされているためもあるだろう。だが、札幌で生まれ育ったぼくには何故か、とてもなつかしさがこみあげてきたのだった。別に昔の札幌に似ていたというわけではない。それなのに今の北海道や信州のどこの街でも感じるものがなかったノスタルジックな気持ちになり、心が落ち着いてゆくのがわかった。あれから一年が過ぎただけなのに、ぼくにはもう「おもいでで夏」のような気がするのはそのためだろう。開拓地としての100年余りの年月や異国の面影の残る街。札幌にある古いアメリカ風の建物とジュノーのロシア風の建物がオーバーラップしてゆく。船の灯の見える港のレストランで渡辺さんとぼくは静かにグラスを傾

けた。(互いに相手が望む人ではない事を残念に思いながら)

人々の親切だったことは渡辺さんが書かれている通りである。二人が別行動をした時の事などを中心に人との出会いに触れたい。

アンカレッジのMr. Jackson kimには大変お世話になった。入山前はもちろん、下山後も帰国の飛行機を待つ間ずっとご厄介になった。ぼく達の他にいくつかの日本人パーティが泊めていただいていたが(数では彼らの方がずっと多かった)、夜が更けるまで熱のこもったお話を聞かせて下さった。本を買い込みすぎて成田で4カナダドル(当時650円程度)さえ両替しなければならぬ状態だったぼくは、自分の足で街をうろつくか、終日ごろごろしているかだった。そんなある日、ドラム蜂隊の方々と一緒にドライブに連れていってもらった。ごちそうになった後、野原で撃った弾は全然命中しなかったが、クック・インレットの夕焼はとても美しかった。

ユーコンでの登山前、ぼく達は50マイル程離れた隣り町まで飛行機をチャーターしに行った。運転免許を持たないぼくらは往復ともヒッチハイク。行きは親切的な技師のH氏がひろってくれた。帰りも途中までは日本にもいたことがあるという中年の婦人にのせてもらった。三叉路でおろしてくれたその人は、ここからは一本道だからすぐ乗せてもらえるわ、と言って去った。まさかその時、3時間もそこで待ち続けることになるうとは夢想だにしなかった。ヒッチハイクは場所がものをいう。そこはたぶん申し分のない所だった。相手にもよる。家族づれはまずダメ。トラックに乗った地元のおじさん風が良い。何台か止ってはくれるが、一人分しか余裕がないとか、ハンティングをしているからどこでわき道へそれるかわからんとか。結局インディアンの一家がガス代を出すならOKだといってくれた。奥さん以外は皆酔っぱらっている。粉ジュースをウヰッカでわったのをさかんに飲めとすすめられた。同乗していた若い白人の男の祖父の家へ寄ったり、墓地を一周したり、正直にいうと無事に帰れるかどうか心配だった。英語に自信がないためもある。妙な先入観もちらついたが、何年ぶりかで旅行するのだという彼らはとても楽しそうだった。他にも数え始めればきりが無いほど多くの人の好意を受けた。

去年のアラスカでのことは一年たった今でもまだぼくの中で整理されない部分が多い。その最も大きなものは、山登りそのものについての考え方である。ユーコン以前と今とではかなり変わってしまったようだ。もともと内包されていたものがよりはっきりしてきたともいえる。ただこれにはもう一つの大きな理由がある。それはともかく、以前のぼくが好きだったのは、そしてまた憧れたのは、ヘルマンプールやボナッティであり、「風雪のビバーク」や「屏風岩登攀記」に感激していた。ぼくが目指したのはより困難を求めての山だった。現実とその努力をしていたとは決していえないが。凍傷で指のほとんどをやられても、山のこわさは知ったが、退こうとは思わなかった。極端に言えば、単独登攀にまでなるとも思った。ところが、長谷川恒夫の「北壁に舞う」を見た時、ドキュメンタリーとしての感動、すごいなあとは思ったし、

彼の情熱も感じられたが、それはそれだけのものだった。ぼくはいつか山を去るだろうということはすでに西高時代から感じていた。ただその封印はボナッティのように華やかにしたいなどとも思っていた。映画を見ながらぼくは、自分がそういう虚栄心(ぼくにとっての)とは無縁の存在となっていることを知った。

初登頂や初登攀の時代は去った。本多勝一のようにエベレストの後に山はないなどといって山を去る、去れる人は幸せかもしれない。松本龍雄の「初登攀行」を最近読んだ。去りつつあるファースト・アッセント時代とのジレンマはすでに20年も前からあった。それはぼくらの時代にはますます大きくなりつつあるような気がする。彼はより困難を求めて海外を目指す。しかし、ヒマラヤ、カラコルム、アンデス、etc.、舞台が移り対象がよりジャイアントとなったにもかかわらず、そのジレンマは変わらないのではないか。

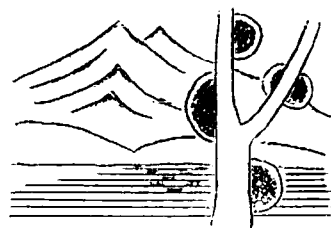
真夏の氷河に雪が降って、ぼくたちは一日中テントの中にいた。児玉さんと渡辺さんがチャパティを焼きながらいろいろな話をしている。そこでティルマンやシプトンの話が出てくる。ぼくは黙って聞いている。

あれはオーロラを見た前の晩だったろうか。ココナッツの酒を飲みながら、ジャックさんがあいかわらず熱い言葉で話しかけてくれる。やはりぼくは黙って聞いていた。

そして去年の暮、ぼくが山がこわくなったという、おまえも潮どきかなといった後で、死ぬなよ、といった高校時代からの友達、なぜぼくが山をこわがるようになったかを彼は知っている……。

あれから一年たった今年の夏、ぼくは9年ぶりに山へ行かなかった。卒業研究で忙しかったためだ。山を離れて、山と自分を考えたいとも思っていた。そして秋になり、やはり山からは離れられない自分だとわかった。ただ、山に対してより困難を求める季節はもうぼくからは去ったようだ。より高く、より険しくから、より深く、より広くへ。己の心の赴く山へ。ぼくはまだ若いし、世界は広い。より「困難」のかわりに何が入るか、美しさでも、自由でも、愛でも……また、より困難を求めるのは何に対してか……。それはこれからである。

最後に、学生リーダーでありながら合宿をさぼることを許してくださった山野さん、またそのために迷惑をかけた先輩、友人、特に松本君に感謝いたします。 1979年10月



自 業 自 得

林 武 志 (6期)

時のたつのは早いもので、つい昨日西高山岳部員として山に夢中になっていたような気がしていたが、現実には息子が富士高の山岳部のリーダーとして山に夢中になっている。いつの間にかこんなに歳月が過ぎてしまったのだろう。私の体力の衰えを感じずのも運動不足だけのためでなく、仕方ないものかもしれない。

今日は私の我が儘を許してくれた両親に感謝すると共に、深く反省し、又山に夢中になった子供を持つ親の気持の一端を記してみたい。

私は大変勝手なことだが、私の子供達には山登りをさせないよう育ててきた。私の山の記録や道具は見せないようにし、山にも連れて行くこともしないようにしてきた。子供は高3の長女、高2の長男、中1の次男、小3の次女と4人いるが、どうやら成功したかに見えたが、長男が高校に入って間もなく「おれ、山岳部に入ったよ」とブッキラボウに言った。がく然とした。中学時代は陸上、中距離をやっていたし、希望もしていたが、まさか山岳部とは。又富士高に山岳部があることも全く予期していなかった。決めたい以上止めさせる訳には行かないし、無理に止めさせようとしても隠れて行く位のことができることは私の経験からも充分判っている。

山岳部に入ることは決して悪いことではない。良い仲間を得るためには最高だと思う。しかし山は危険が多い。親として大変心配である。止むを得ないから山へ行くならしっかりと、その技術と知識を身につけさせよう、と決心した。息子に富士高の山岳部のことを聞くとOB会は組織されていないらしいが、古い歴史を持ち、現状は大学生が山について行き、先生も2人同行するとのこと。年間計画も無積期のみとして、公式山行計画をつくっている。まずまずだ。私もさっそく西高の新人歓迎会に参加し、最近の高校生の様子を調べてみる。服装、道具は大変豊かに変わったようだ。6月には山岳部員の父母会が行われ私は出席した。父親の出席者は私だけだった。先生は若く、山岳部経験者ではないが、それぞれサッカー、卓球の経験者であり、真剣に取り組んでいる。計画のチェック、山の同行、反省会等、生徒とOBの自主性に任せながら、枠からはみ出さないよう見守っている。西高の考え方と大きな違いがないらしい。ひと安心。

息子は夢中になって山に入った。基礎体力があった為か、バテる経験もなく一年を過ごしてきた。驚いたことには、2年生が夏を終るとリーダーを1年に移すということだ。全く無茶なことだが、受験を考えると止むを得ない現状なのかもしれない。

息子はリーダーとなった。これは大変だ。こんな未熟者がリーダーでは大変なことだ。私なりに山についての指導をしなければ、と時間を作っては山のこわざについて話をする。秋に3

回息子と山に入り、読図を中心に指導する。(但し、9月に御岳-大岳-馬頭刈尾根に行ったときは、自分の体力も忘れて、スタミナ配分を忘れ、生れて初めてパテ、すわり込んでしまった。)今年の5月5日には水無川本谷を登った。(富士高の公式山行には沢歩きがないので教えて欲しいとのことであつたので。)どうやら自分の身の始末はできるよになつたようだが、他人の面倒までは未だ難しかろう。他人様の子供を預かって山へ行くことを任せられるかどうか、大変に心配である。幸い熱心なOBがいて、きめ細かい指導を受けている様子なので無事を祈るばかりである。今年の父母会も6月に行われた。私の仕事が忙しい最中であつたが、半日身体をあけて出席した。父親はやはり1人だけであつた。今年の1年生は家族で山登りをしていたのが何人かいる。そのうちの1人の母親は「自分のペースで歩け」と教えているという。困つたものだ。白紙の方がかえってよらしい。しかし、2年生8人、1年生5人であるから、1年生に対して指導は楽のようだが、2年の統率が大変なようである。

思えば私の2年生の秋のこと、リーダーを引継いだ9月の山行で山岳部を2つに分裂させてしまったことを生々しく想い出す。当時2年生は13人いて、考え方の相違でスポーツアルビニズム派と、ハイキング派とに二分し10月、11月は別々に山行を行った。記念祭の時OBが10人程集まり、仲介をして統一のための話し合いが開かれ、今後問題を起こさないためにその後何回かの会合で部則を作つた。そして12月統一し、5人の2年生が退部した。2年生の把握は大変に難しい。息子に私の二の舞はして欲しくない。

私がなまじ山岳部について知らなければ余計な心配をしなくて済むのかもしれないが、これも自業自得である。私の父も個人的に山登りは好きで家にテントその他もあり、家族でキャンプに出かけたこともあつた。従つて、私が中学の時山岳部に入つたときは喜んでくれたものだった。しかしその後私は山に夢中になり、父のことを忘れていたが、大学を卒業する頃、ある時、ふと母から父は私の山行中、朝新聞を見るとき、まず遭難記事を探し、私に関係がないとホッとしている様子であり、夜も眠れないらしい。とこのことを聞き、申し訳けない気持で一杯になり、自分の身勝手を深く反省しました。

今その父親の立場になってみると、本当にその心配が判りました。ただただ息子のそして、仲間の無事を祈るばかりです。(54. 7. 8)



山 行 報 告

1973年度

〔73・12〕 八ヶ岳定着

参加者：CL 山野、中村

高校生の冬山合宿に行く予定であったが、中止になったので2人で八ヶ岳に氷瀑でも登ろうと出かけた。

12/29 曇

茅野～美濃戸口～赤岳鉱泉

雪は多くなかった。美濃戸口まで河原通しに登って時間をくった。鉱泉に暮営。人が多い。

12/30 曇

発6:30～小同心右稜9:30～小同心クラック12:00～横岳16:00～鉱泉18:30

三叉峰ルンゼから石尊稜に登る予定で出かけたが、視界が悪いのと地理不案内の為に、小同心稜の間のルンゼに入る。ルンゼ内はラッセルのみで枯滝にはばまれ、基部から小同心右稜にとりつく。すぐ岩場でアンザイレンする。3ピッチ岩場が続いたが、いずれも容易。雪稜をコンティニアスで登り、小同心基部に着いてルート of の誤りに気付く。昼食後小同心クラックを始め、山野トップで登る。高度感があるが、ホールドはがっちりしたのが多い。アイゼンを付けての岩登りに不慣れな為と、ホールドの雪をはらったりで時間をくう。トップを交代し、全部で3ピッチ4時間かかって抜ける。風をまともに受けて、寒さと疲労で非常に消耗した。横岳から地蔵尾根を下って帰幕。

12/31 晴

発9:00～ジョウゴ沢右俣～枯滝、墜落14:00～鉱泉17:00～美濃戸21:00
前日疲れた為、おそく起きる。ジョウゴ沢右俣で氷瀑3つ4つ練習に登るつもりで出かける。10メートル以下の小氷瀑を快適にバケツを切って登る。ザイルを出してアイスハーケン、ロックハーケンを使った滝が1か所あった。昼食後、もう少しで上に出そうなので登ることにする。小滝を2つ越して20メートルの枯滝に出る。最後の滝らしく右岸に巻道あり。他のパーティーが行く。中村トップで1ピッチ急なフェースと階段状の岩を登り、バンドの所でジッヘルする。2ピッチ目、山野トップで1段上のバンドにハーケンを打って登る。ハーケンはあまりきいていなかった。その上は3メートルで落口だが、少しかぶり気味である。ハーケンを打ち、つり上げを試みたが腕が消耗して登れず。引き返すことにし、下のハーケンをつかん

で下のバンドに跳び降りようとしたところ、ハーケンが抜けて墜落する。滝の下の雪の上で止まる。30分位意識不明。頭部を数か所負傷。中村に傷を目出帽でおさえてもらい、下り始める。途中滝を1か所、アブザイレンで下る。鉱泉近くになってやっと意識がはっきりする。赤岳鉱泉のおばさんに傷の手当をしてもらい、スノーボードで美濃戸の林道終点までおろされ、そこから消防署のジープで茅野の横井病院へ運ばれる。大晦日であったが、すぐ傷を縫ってもらい。1月6日まで入院。正月早々上速野さんや野原さんに来てもらう。退院後、首がしばらく痛かったが脳の方は異常なく、傷もかくれて目立たなくなった。

今回の山行は計画書も出さずに出発し、山に入ってからルートを決めたり、ルートを誤ったりして最後に事故を起こし、非常に問題があり深く反省しています。事故の際御世話になった皆様に御礼申し上げます。 (山野記)

1974年度

〔74・10〕 谷川連峰赤谷川本谷

参加者：渡辺、吉田、森下、久米

赤谷川、荒々しい野性を持つ谷筋、そして源流のやさしいなだらかな草原、
— 忘れられない。

10/18

渋沢出合12:20～越の滝出合14:20

後閑よりタクシーを奮発して渋沢出合まで入る。少し林道を行き、木隠れの道を対岸に雄滝雌滝を覗きながら谷におりたつ。ツェルトをはる。青くすんだ底の見える深い淵があったが、多数の白い虫らしきものが沈んでおり、気持ちが悪かった。

10/19 小雨

発7:15～裏越のセン10:20～ドウドウのセン上13:55～ビパーク地17:00

マワット下のセン、マワットのセンを越えて振り返ると、エビス大黒沢が連瀑となって切れこんでおり、大小の岩塔を持つ尾根が魅惑的にキレットにのびている。巨岩が積み重なった沢沿いを抜けると、岩壁にとり囲まれ、赤や黄に染まったカエデの葉がそこかしこに散らばる、秋色濃い裏越のセンに対面する。昔、人々が滝を神として崇め祭った事が、現代人の僕にも実感としてわかるような気をさせる滝だ。その気持を一言で言えば、やはり畏れというものだろう。滝の内側をくぐり右岸の溝を登る。ドウドウのセンは大きく、高捲きアブザイレンで河原に降り立つ。澗があり水量多く高捲く。泡がぶかぶかと流れてきて不気味だ。時間も遅く雨足も強くなってきたが、よい場所が見つからず、よくすべる草付の傾斜地にツェルトを張る。非常に寒く、夜中歯をガタガタいわせていた。

10/20 雨

発9:30~オジカ沢の頭12:20~肩の小屋13:40~土合16:30

朝見ると吉田さんは半分身を外に出していた。谷は広い平らな草原状を流れる。幾つもの小沢となった。続きの良さそうな小沢をつめ、最後の急な岩溝を凍った草付たよりに登り、ヤブを少しこぐとオジカ沢の頭の避難小屋に出た。ガスで何も見えない縦走路を谷川めざし、西黒尾根を下る。明日は一ノ倉の南稜を登る予定であったが、びしょぬれの身体で消耗していたし、天気もよさそうでないので東京へ帰った。(森下記)

(74・11) 槍ヶ岳北鎌尾根

参加者:CL 渡辺, 吉田, 西井, 森下

11/1 晴

葛温泉6:20~湯俣11:00~千天出合14:05

温泉を出た頃は小雪がバラついていたが、歩くうちに真青な青空となり、休むなり震えてくる。工事現場のモウモウとした砂ほこりの中を皆ブツツとして歩く。北鎌が見え出すと湯俣も近い。今日は千天出合にはることにする。

11/2 晴

発7:00~取付7:30~稜線8:30~天狗の腰掛14:30

天上沢を少し行き、尾根に取り付く。急な岩場があるが、一時間余りで稜線に出る。雪はそうなく、天上沢側が氷っている所が多い。どれが何峰だということはチンブンカンブンであるが気にせず。ちょっとしたギャップあり、岩場あり、登っては降り登っては降りして、まあとにかく天狗の腰掛まで来る。速く獨あたるの貯水池がコバルト色に光っている。頭上に黒々と聳えたつ独標を、眼下に夕日照り返す尾根の頭一つ一つ落ちゆくのを見やるは、感激的だ。夜真暗闇の中、一点ぼそぼそとひかっている。三俣山荘だろう。

11/3 晴

発6:30~独標9:00~北鎌平12:00~槍13:40~肩14:20

今日も快晴だ。独標はアンザイレンしてまく。槍を目前にしての登高は気分がよいが、下からどんどん人が来るし、寒気のためか後頭部がガンガンする。北鎌平まで来ると、槍が手にとるように見えるが、どこを登るかよくわからん。セノハサミより1P凹角をスタカットで登りまわりこむと、ポカッと槍の頂上に出た。人のいることいること、夏山同然だ。穂高が真白だ。

11/4 晴

発7:30~大天井岳13:15~燕山荘15:20

昨日槍沢をおりた西井さんと別れて、さあ表銀へ出発だ。表銀は全然雪がなく、日の光が暑くてたまらん。大天井を直登したが、フラフラだった。

11/5 雨

燕岳往復発7:40~中房温泉9:20

(森下記)

[74・12] 冬山合宿 鹿島槍ヶ岳

参加者:渡辺, 吉田, 久米, 森下

12/16

信濃大町~鹿島部落

夜行は疲れるということで、昼行とする。中央線に残る数少ないディーゼル急行である。途中で特急に抜かされたり。こんな列車に乗るのもくたびれる。大町に着き、大衆食堂で夕食をとる。タクシーで鹿島部落へ。狩野さん宅へあいさつをする。その夜は狩野さんの納屋で寝た。

12/17

発~1970ピーク

朝、ガスが少々。狩野さんの家の裏手からすぐ急登が始まる。しかしながら2、3日の晴天と、ラッセルの跡があるため何の苦労もなく尾根へ出る。次第に天気は良くなり、1760ピークを過ぎるあたりで鹿島槍を見る。稜線では雪煙がまっている。1970米ピークで前進か幕営か迷うが、このピークに幕営することに決定。天幕設営の後、ザイルワークの練習をした。雪がやわらかいので、確保の練習はあまり効果はなかった。

12/18 雪 停滞

朝起きると吹雪である。視界は比較的良いようだ。8時過ぎ停滞を決定。ラジオを聞きシュラフにもぐり1日を過ごす。

12/19 雪

発~トンガリピーク~2430ピーク

昨日と同じような天気である。雪は昨日よりは小降りのようだ。オーバーシューズ、アイゼン、ワカンをつけ出発。交代でラッセルをしてゆく。トンガリピークに登るのに雪がボロボロなので苦勞する。トンガリピークで昼食をとる。ここからやせ尾根が始まる。2人ずつコンテナリュアスで行く。小冷沢、矢沢側、共に切れているが、視界がないので恐怖感も何もない。1か所、ザイルをフィックスする。予定より大幅に遅れて白沢天狗尾根と合流。1時間程登った広い尾根に幕営。雪はあまり積もってなく、揺るとハイマツがすぐに出てくる。食料のニラがつぶれて、テントの中がニラの臭いでいっぱいである。天気図をとる。明日も本日よりような天気とのこと。

12/20

発~爺ヶ岳中央峰~赤岩尾根分岐~冷池

やはり昨日と同じような天気である。1Pの後、アイゼンのみで行く。小冷沢側は雪庇が出ているようだ。雪面が固くなり、しばらくすると山頂。テルモスのコーヒーがうまい。三角点

の横に西朋の赤旗を立てた。夏道づたいに冷池へ下る。樹林帯へ入ると、ラッセルに悩まされる。赤岩尾根分岐に標識をつけた。冷池小屋は閉鎖されている。池の上あたりに設営する。

12/21 くもり 停滞

小雪がバラついている。風は強い。日程に余裕があるので停滞とする。吉田、風邪の為調子が悪い。午後晴間ものぞく。渡辺、久米、森下で先の様子を見に行く。1時間程ラッセルをし、引き返す。時間の余裕があるので雪洞を作り、時を過ごす。天気図をとる。明日は快晴のようだ。

12/22

冷池～鹿島槍北峰～冷池・撤収～赤岩尾根～高千穂平

予定通り晴天である。アタックザック・アイゼン・ピッケルに身をかため出発。風は強い。広大な尾根を快調に進む。剣、立山、槍、裏銀、妙高方面の展望がすばらしい。山頂（北峰）で記念撮影。テルモスのコーヒーで乾杯。五竜、白馬、日本海の展望は抜群。冷池へひきあげる途中、北九州大山岳部に出会う。昼食の後、撤収。赤岩尾根へ向かう。分岐の所、降り口がよくなく、ザイルを160米フィックスする。ペロンとした急斜で、雪崩が出そうな感じ。急斜が終わると、赤い岩混じりでフィックスをくり返す。コンティニューアスに切り換え。1Pで高千穂平である。鹿島槍が目前にのしかかる様にそびえている。月がとてもすばらしい。明日も快晴だろう。

12/23

高千穂平～大谷原～鹿島部落

1Pほど下ると、デボとトレールがある。シリセードなどで快調に下る。途中、トラバースの所で柔い雪が崩れ、久米20米ほどスリップ。油断は禁物である。二俣の手前でソニーの山岳部に出会う。小冷沢の奥に爺が青空に輝く。大谷原で日光を浴び大休止。鹿島部落に着き、狩野さんへ無事下山を報告し、野沢菜とりんごをごちそうになりながら、一筆したためる。大町で東京へ無事下山を報告、解散した。

(久米記)

〔75・2〕 八ヶ岳阿弥陀南稜

参加者：渡辺、久米、森下

2/10

新宿発23時55分、長野行鈍行に乗車。このポロ客車は3月9日でお払い箱とのこと。毎日新聞の記者にインタビューされる。上速野氏から見送りをうける。

2/11

茅野～学林～立場山～阿弥陀岳～行者小屋～赤岳鉱泉

茅野から美濃戸口行に乗車、学林で下車する。我々の他にも、阿弥陀南稜へ向かうパーティがもう一つあるようだ。このあたり別荘地の開発が進んでいる。のどかな高原の林の中を立場

川を右に見て進む。広河原沢を分けると旭小屋。小屋の裏から急登。雪は全く無い。南稜に取りつくと雪があらわれる。快調に進む。昨日の連休に多くの入山者があったのだろう。トレールはバチクリついている。立場山付近でアイゼン、オーバーをつける。2540mピークへの登りは、ラッセルに苦しむとのことだが、雪もしまり、アットい間に到着。幕営の跡がたぐささんある。予定ではここに幕営。しかし調子も天気も良し、時間もタップリ。よってGO、右には権現の雄姿があざやかなり。P2の手前で、アンザイン。いよいよ核心部。直登をさけ、左へまわり込む。左下は広河原沢。ここは広河原3ルンゼの右股のツメである。スタックカットを適当につかい、難なく越える。岩とアイゼンのすれる音が快い。P1も左側に回り込み乗り越すと、すぐ阿弥陀の山頂。「絶景カナ、絶景カナ」赤岳が西陽に輝く。大同心上部も見える。ザイルをつけたまま、中岳とのコルへ下る。ここから行者小屋までシリセードですっ飛ばす。荷は軽いスピードは出る。行者小屋から山一つ越し、赤岳鉱泉。昨日の連休は相当にぎわったらしく、幕営の跡、酒ビンが見事である。明日は、大同心の偵察を下山することにする。

2/12

発～大同心大滝～赤岳鉱泉～美濃戸口

来月氷をやるという話があったため、大同心、小同心がどんな様子か見に行く。大滝は三分の一は雪に埋っている。連休中に多くのクライマーが来たのだろう。ピッケルのカットの跡が多く残っている。我々はアイスハーケンを使い、直登することにする。平型、V型、スクリュー、シュピラーゼを色々使いテストする。シュピラーゼが一番使い易いし撤収も簡単である。平型はほとんどビン曲ってしまう。ハーケンの音、アブミの音が氷をつたわり共鳴する。カランカラン。1Pで登れる所まで登り、アブザイレンで下る。その後、小同心を見に行く。滝は雪に埋ってしまっている。これでは氷は登れない。氷は正月ごろが良いようだ。赤岳鉱泉へもどり撤収し、美濃口まで突走る。

(久米記)

〔75・3〕 南ア中部縦走 荒川三山～赤石岳～大沢岳

参加者：渡辺(喜)、森下、久米

南アルプスの悪沢岳から大沢岳までを縦走した。予定では、聖岳までであったが、停滞が重なり、大沢岳西尾根から遠山川に下った。3人で、実質5人用テントを背負うハンディーはあったが、軽量化により、30余kgの荷で、比較的、スムーズに動けた。当初は、北アルプスの酒沢岳西尾根より奥穂を登る予定で準備を進めていたが、直前に吉田が病気で参加できなくなり、変更した経緯がある。前計画に比べ、技術的には易しいが、積雪期の縦走は、新人には、良き経験であり、自信になるだろうと考えた。とは言え、多分に恣意的な山行であり、年間の最終目標としての春山山行という意味は薄れた。登りたい山に登ればそれで良いようにも思う。だが、会の山行として、それではすまされぬ側面もある。K氏との議論を想起する。「山から帰って、御苦労さんと言われるのは妙に思えるんですが。」「自分は登れなくても、仲間が登

ってくれるだけで嬉しいんだ。」「この山ならラッシュで登れちゃいますが。」「稜線で、吹かれたり、極地法の技術を知ることの方が価値がある。」いやしくも、西朋が山岳団体である以上、その会員の登山は、その個人だけで、完結するものではない。今年度は、盛んに山行を実施できたのも、社会人の絶大な協力があって初めて可能であったわけだ。

3/17

9:55 発電所～15:30 転付峠～17:15 二軒小屋

タクシーが発電所まではいってくれたので、2時間ほど得をした。それでも、二軒小屋に着いたのは夕方であった。峠付近で、軟雪に苦労したが、トレースもあり、比較的、快調な入山であった。広い飯場に3人だけ。薪ストーブが燃える。曇、夕方に雪。

3/18

7:30 発～11:20 ロボット雨量計～12:35 マンボウ沢の頭～14:15 幕営

終日、快晴無風。ロボット付近まで、急な登りだが、雪が締まり快調だった。昼になると雪が腐り出す。樹林帯の中に設営。

3/19

6:10 発～8:00 千枚岳～10:05 悪沢岳 10:45～12:20 中岳～12:45 前岳～14:00 幕営（荒川小屋上のコル）

今日も快晴無風。1Pも歩くと樹林帯を出て、千枚岳へのクラストとした斜面となった。その頂に立つと、赤石岳は大きく、聖岳は、遙か彼方であった。悪沢岳の頂上直下で、女子のみの8人パーティーに会う。聖まで行くと答えると、尊敬の眼差しで見られた。悪沢岳の下り、前岳の下りが、ちょっとした岩場になっている以外は問題ない。テントを張ったコルは、二重山稜状で広い。先客のテントからなるべく離して設営した。渡辺は、荒川小屋まで往復した。

3/20

4:50 起床～6:00 停滞決定

昨夜10時の天気図で低気圧の接近を知った。朝はまだ曇天で視界もあったが、西より黒雲が去来するのを見て停滞と決めた。7:00頃より悪天、強風となる。2700mの稜線上で、西風を味わった。

3/21

7:55 発～8:40 大聖寺平～10:40 小赤石岳～12:10 赤石岳～12:20 幕営

6時頃より快晴となったが、風が静まるのを待って出発。大聖寺平は、風の名所で、幕営には向きそうにない。小赤石の登りで、西風、ガスとなり、視界50mほどとなる。斜面が急になる手前で、アンザイレンした。雪と石ころの斜面を登れば小赤石であった。すっかり悪天となり視界は10mほど。今朝の快晴に欺かれたわけだ。ここより渡辺がトップで進む。かろうじて識別できる雪庇の西側をトラバース気味に進む。途中、急な10mほどの登りで、足下が崩れそうなのでザイル確保をした。森下は昨夜、眠れず、遅れ気味であり、励ましながら登っ

た。赤石岳山頂の避難小屋の横にテントを張り、汁粉を飲んだ。

3/22

7:00起床 停滞

昨夜来、激しい風雪となった。9:30、外に出ると快晴になっていたものの、西風が強くとても歩けたものではない。東シナ海の高気圧が移動して来るのを待った。午後、風がこやみになったので、皆で、赤石岳山頂付近をぶらついた。冬山で、午後からでも好天となれば、動くのが定石である。だが、明日の好天は確実であったし、14:00から移動しても、百間平がせいぜいであつたらう。ならば、むしろ、この3000mの頂で、夕暮れを眺めたかった。で、停滞として、後、イグルーを作ってみた。やがて、山は、静かに暮れなずんでいった。西日に染まる山脈は、この山頂の3人のためだけに、赤く荘厳に連なっていると信じたかった。

予定では、遅くも今日、聖岳の稜線にいらなくてはならなかった。南アルプスの天気の前春の安定を予想して2日のスベアしかなく、それでいて、都合2.5日分、行程が遅れていた。それで、聖岳を諦めて、大沢岳西尾根より、梨元へ下山することにした。

3/23

6:25発~7:35百間平~9:10大沢岳南峰~9:55大沢岳~10:10西尾根分岐~14:05唐松峠14:55(フィックス)~17:00大沢渡小屋

予想通りの快晴無風。アンザイレンして出発。赤石岳の下り、百間平と、よくクラストしていて、アイゼンが気持ちいい。途中、僅かだが、ナイフエッジあり。大沢岳を登りながら、眼をあげると、一面にウロコ雲が出ていた。雲はみるみる広がり、午後には降雪を見たが、夕刻には、再び青空に戻った。大沢岳西尾根は、上部が、部分的に急だが、特に問題もなく、緩やかな樹林帯となり、高校生向きの尾根である。ただ、名ばかりの唐松峠よりトラバースになるので、冬山の久米の滑落の教訓として120mフィックスを張った。赤旗があつたが、一度、尾根を左に間違えかけた。ものういラッセルに飽きる頃、雪も消えて、大沢渡小屋に着いた。窓を通して、純白に聳えている兎岳が優しく見える。無人の小屋で気ままに振舞えるのが楽しい。食堂で、食事をとった。ストーブのつきが悪くて煙たかったとは言え。

3/24

5:55発~6:10大沢渡~8:45北又渡~10:50本谷口(梨元)

予想に反して昨夕より快晴となり、今日も良い天気であった。結果的に行けば聖岳も登れたはずだが、スベアの残りのないまま天候に賭けるのは、やはり妥当ではあるまい。撤去された林用軌道の跡を歩く。所々、崩壊しているが、やがては、林道が延びて(既にブドウ沢出合まで完成)、伐採のトラックが行き交うのであろう。山の変貌を惜しむが如く、各自、イヌクギを捨てて記念とした。北又渡の飯場を過ぎる。遠山川は日を浴びておどかには流れている。その流れに沿って、猫の額ほどの畑を耕やす人達の生活が、ポツンポツンとあつた。梨元では、ランチもすべき場所も無く、あつたにしろ金も無かつた。長い山行、自分らが、いとおしん

だ山々との別れには、それなりの儀式が欲しかった。車で、平岡に出て、ささやかな祝杯をあげた。
(渡辺記)

1975年度

〔75・7〕 夏山合宿 黒部東沢～雲の平～立山～剣

参加者：久米、森下、廣瀬、中尾、太郎より 大和田、榎本

今回、渡辺喜(21)は教員採用試験、吉田(23)は就職活動の為不参加。我々のみでしかも平凡な縦走路を避けようということで、黒部東沢-雲の平-立山-剣に決定。

7/24

新宿発

いつもながらの出発。差し入れを受け取る。

7/25

大町7:30～扇沢8:15～黒四ダム～平小屋14:20～奥黒部ヒュッテ17:20

関電トンネルをトロリーでぬけると黒四ダム。いよいよ山行が始まる。平小屋まで地図で見ると平らだが、実際は小さい登高のくり返し。重荷が肩に重い込みむし暑い。平の小屋で大休止、渡しの時間までゴロ寝する。山口大WVが来る。渡しといっても、小さなモーターボートである。無料。針の木側につくところより雲行があやしくなる。奥黒部ヒュッテへの道を急ぐ。途中より夕立。到着してすぐ設営。中尾、廣瀬に食事の準備をさせ、森下と滝の様子を見に行く。滝の右岸を乗り越すようだ。岩はガレてもろい。明日の晴天を祈りつつ就寝。

7/26

起4:30～発6:50～滝の上7:35～一ノ沢出合い11:00～ドロヤナギ15:00

朝、福田氏のレリーフを見つける。昨日、渡辺喜氏や伊東氏に教えられた付近を捜したが見つからなかったのだが、今朝、天幕場の裏手の大きな岩に埋め込まれた、レリーフを発見。氏は44年の集中豪雨で、この付近で行方不明となったのである。出発前に一同一分間の黙祈をささげる。滝をのりこす時、それ程ヤバクはなかったが、重荷、岩がもろいので「安全第一西朋登高会」のモットーでザイルを使用。東沢で滝らしい滝はこれだけだ。出来るだけ、水に入らないようにして進む。徒渉を余儀なくされること数知れず。靴のまま進む。快い。景色が変化にとほしいので一面たいくつ。目標をつかみにくいので、位置の確認に困難をきわめる。大きなドロヤナギのある平地に幕営することにする。夕立が来る。夕立が去ると東に三ツ岳の稜線が見える。天気図を取る。ラジオの受信状態が悪い。明日にそなえ、早々に眠る。

7/27

発5:45～東沢乗越12:20～祖父岳14:50～雲の平15:45

今日の行程は長い。早々にメシをかき込み出発。昨日同様、徒渉の連続である。巻き道と思

って入ったら、どんどん登り行き止り、枝沢を、ころびながら下る。9時ごろ、前方の視界がひらけ、水晶岳、雪溪、青空がまぶしい。高山植物も美しい。真に本山行のハイライト。どんどん高度をかせぐ。ここでハブニング。森下の靴のビブラムがはがれる。針金で応急修理。急な斜面の御花畑をぬけると東沢乗越へ飛び出る。槍は雲にかくれて見えず。ふり返ると、東沢が眼下に見える。ここで短パンになる。雲の平への平凡な縦走路を急ぐ。槍は見えないが、三俣蓮華、野口五郎、黒部五郎の展望は雄大だ。ここらが黒部の源流。祖父岳に立つと、すぐ下に雲の平の幕営地が見える。一気にかけ下る。

7/28

発6:00～薬師沢出合11:15～太郎小屋14:25

本日は女子と合流する。朝起きると、ガス。雲の平を、ガスの中で走りぬける。アラスカ庭園付近で、黒部五郎が見え、ガスが晴れる。雲の平から薬師沢への下りは急である。しかも泥で岩がすべる。全員よくシリモチをつく。途中で、カワイコチャンのパーティーとすれちがう。廣瀬と中尾がギャーギャーわめく。薬師沢出合で昼食。森下が水浴するといったが、冷たいのですぐ退散。太郎小屋を目指して進む。薬師沢に別れを告げ、高度をかせぐ。太郎小屋が見えてくる。ここらに来ると人通りが多い。天幕場も色取りどりのテント、おまけに騒しい。山は静粛に限る。女子がエスパースを張っている。プリンと水ヨーカンでむかえてくれた。

7/29

発5:30～薬師岳7:50～北薬師10:20～間山11:40

今日より、女子と行動を共にする。女子は荷も軽いので、ベースは男子と同様とする。天気は良い。はるか彼方に白山が見え、笠ヶ岳、槍、雲の平もはっきりと見える。風も無い。薬師山頂でジュースを飲む。間山は真近に見えながら、なかなか着かない。天幕場の裏はキジ山である。山の心髄は野グソにあるとはいうものの、なんとかならないだろうか。立山方面に灯が見える。明日も晴れだろう。

7/30

発5:00～スゴの頭7:40～越中沢岳11:05～五色ヶ原14:00

朝、起きると又してもド快晴。これから魔の越中沢岳への登りが始まる。急登の連続、長いスゴの頭へやっと着くも、前途の登りを見てウンザリ。デンデンムシムシカタツムリの如く、急斜面にへばりつき、10時山頂へつく。東の下方に、黒部湖がエメラルド色に輝く。五色ヶ原側の斜面は緩やか。越中沢岳とは、全くもってふざけた山である。この辺は北アのメインルートとあって人通りも多い。鷲山に立つと、五色ヶ原の天幕場が見える。「お疲れさま」到着してジュースを飲む。そしてある者はアイスコーヒー。コーヒーは使い過ぎである。後立山方面の展望も良い。本日は屋外で「いただきます」

7/31

発4:30～ザラ峠5:10～浄土山8:55～一の越10:00～雄山11:20～剣沢

幕营地 15:10

本日で縦走は終了。森下は毎日、靴の不調で悩んでいる。朝は雲一つなくさわやか。獅子岳、鬼岳-竜王岳-浄土山と小さなピークが続く。雪田を何回か渡る。浄土山の富山大立山研究所の前で昼食を取る。一の越-雄山には、アリンコの如く人が行列を成している。間山より同じ行動をしている、農大のパーティーとは今日顔を合わせた。室堂には、バスや建物が見える。一の越からは、多くの観光客（ミーチャンハーチャン、ジャリ、ジジババ）の間を黙々と登る。我々は場ちがいの感さえある。雄山山頂で一休み。雄山は実際3千米以上あるのだが、三千米以上の場所は雄山神社に独占され、お札を買わねば入れない。買うと順番に入れてくれ、ドンドンでゴヘイをふり回してくれるという次第。雄山を過ぎると再び登山者の世界である。大汝を過ぎるといささか、疲労を感じる。乗越を過ぎると再び登山者の世界である。大汝を過ぎるといささか、疲労を感じる。乗越に立つと下に剣沢のテント村が見える。剣は雲の中にかくれている。走って下り幕営する。やっと縦走も終り。これからは待望の岩登り。夕やみ迫るころ、雲も晴れ、剣の雄姿を目にした。

(久米記)



終始天候に恵まれ、素晴らしい展望には息をのんだ。日程の長さと言ひ行程と言ひ、男子との同一行動と言ひ、私達2人にとっては、量・質共にたいへんに大きな山行であった。現役時代に、女子部員の少なさ故に十分な経験を積まず、従って十分な力を身につけていなかったことが、この山行の中では、種々な面で反省すべき点として現われた。女子の山行としての自覚、目的意識に欠ける……という批判を受けたが、これは、自分達の力に対する自信のなさが一番の原因であったと思う。この自信のなさが「男子に連れていってもらうのだから、迷惑をかけないように一生懸命ついていかなければ……」という意識を生み、自分たちの山行としての積極的な態度が、つい忘れがちだった。が、全く受動的で無目的であったわけではない。私達にとっての目的は、長く変化に富んだ縦走を無事に終えることにあった。この目的は8割がた達成されたものの、山行中に計画の変更を申し出たりして、自信のなさを気力でのりこえようとする姿勢がなかったことは、反省すべき点である。幕营地での行動についても、男子との協力がうまくいかなかったが、この点については、事前に話し合う必要があったと思う。以上は山行に対する姿勢の問題であるが、登山技術の面でも、未熟な点が多かった。

種々の意味で、問題点の多い山行だったが、私達2人がこの山行から得たものは大きい。現在は、2人共西朋から離れてしまっているが、現役時代からこの山行に至るまでのOB、OG、先輩の方々の指導、手きびしい批判は、以後も、私達2人それぞれの中で、生かされていくことと思う。

(大和田記)

[75・3] 谷川岳一ノ倉沢烏帽子沢奥壁

参加者：吉田、森下（中央カンテルート）西井、他一名（変形テムニールート）

8/26

取付 9:00 終了18:30

前日一ノ倉の出合にテントを張っていたら、かっ幅のよい三船敏郎がやって来た。付け人の説明を聞いてふむふむと頷いていた。ぱっとしない天気であったが4人で奥壁をめざす。平行したルートなので互いの動きがみえ、声をかけ合いながら登る。滝沢スラブが対岸に見えるが、ドームよりスッパリきれ落ちたスラブはすごい。中央カンテは全般的には岩も硬く、きわどいフリーもなく、手と足で半日楽しく岩と対話のできるルートだ。（ただしあまり人のいない時）終了点で一緒に昼食を食い南稜を下降した。沢沿いの木陰の道より振り返ると、この一大円形劇場が午後の日の光を浴びてシーンとしていた。（森下記）

[75・9] 谷川岳一ノ倉沢

参加者：中村、森下（衝立岩正面壁ダイレクトカンテ）伊東、中尾（烏帽子岩南稜）

9/23

大雨で、朝からマッチ棒に刻みを入れてポーカーをやった。社会人は日頃寝不足のためかよく寝ている。午後になって、雨の降りしきる中幽の沢の大滝上までいった。当然何も見えず帰る。

9/24

一ノ倉出合8:10～取付10:00～終了（北稜）17:30～一ノ倉出合23:10
（ダイレクトカンテ）

このままさよならだと思ったが、小雨になったので、一応取付まで行くかと8時頃のこのこ出掛けた。しかしどんどん天候は回復してきて、中央稜取付で南稜に行く伊東パーティーと別れた。衝立沢をトラバースしアブザイレンを交えて取付に着く。1P目はもろい岩場だ。ここからくの字型のきれいな凹角をルートはとっていく。完全な人工登攀となり、人工の下手な自分は、壁が少しでもかぶってくると目は吊り上がり息はゼーゼーとなり大分時間をロスさせた。40mいっばいで足のおける足場がある。3P目は凹角を直上しオーバーハングの右をかすめていく。すると、ちょっとこんなもんで平気なのでしょうかと考えざるを得ないアブミ確保点がある。4P目北稜へフリーを交えてアブミトラバースだが傾斜もゆるくなりホットした。北稜に出た時にはもう日が暮れようとしていた。随分時間がかかって中村さんにはすまなかったのとつくづく腕力不足を思い知らされた。真暗闇の中アブザイレンでコップスラブに降り立ち、色々の事があって月明りをたよりに一ノ倉の出合いに着いたのは真夜中だった。ハムと野菜をいためて食べたがうまかったなあ。テントをたたみ幽霊でもでそうな自動車道を社会人は今日

(ノ)の仕事を気にしながら、僕は何も考えることなく歩いていった。

追記；土合、水上で連絡先に連絡せず、諸会員の方をお騒がせしてすみませんでした。

(森下記)

〔75・12〕 冬山合宿 遠見尾根より五竜岳～唐松岳

最上級生の渡辺さん、2年の森下、1年の中尾というパーティーの構成を考え比較的なじみの深い五竜唐松の稜線を縦走することにした。

12/25 ガス

キャビン駅9：00～小遠見12：15～幕营地14：25

キャビンに乗りつき、新雪の積った遠見尾根を行く。中遠見近くにテントをはる。雪がシンシンとふる他何の音もしない静かな夜だった。

12/26 曇後風雪

発8：20～大遠見9：10～五竜小屋13：45

新雪が積りラッセルして行く。大遠見すぎた頃から視界がほとんどきかず、風雪中雪庇に気をつけ重荷に苦しみながら休み休みいく。きかない視界に大きな雪庇が頭上に見えだし稜線だとわかる。雪庇の下をトラバースし、強い風におし飛ばされそうになって五竜小屋に入る。

12/27 風雪 停滞

停滞。遠見尾根よりアタックするパーティーあり、白岳より少し下った所の下りで雪庇を一人ふみはずしたとの事で救援に向かう。3時間ほどザイル操作しひきあげる。元気だったが、片足をアイゼンでひねっており歩けず小屋にかつき上げる。余裕のある我々のテントに入ってもらった。一緒に思い出の赤いヤッケを歌った。

12/28 快晴風強し

下界とうまく連絡とれず、この好天を機に下ろす事にした。早大理工ワングルが下りるとの事で同行してもらい。コルまで渡辺、森下も手伝いザイルで確保しつつねかして下ろす。

12/29 晴れ後吹雪

発7：00～五竜岳9：00～11：00小屋12：30～コル13：20～ビバーク地
17：10

五竜岳をアタックする。頂上直下のコルまで途中より稜線沿いに行くのと、トラバースして行くルート2つとれるが稜線沿いに行った。2、3P岩稜でスタカットでコルに下り、頂上に着く。下りはアイゼンをきかしてクローアルを下りトラバースして行った。天候は下り坂であるが唐松まで充分いけると判断し出発。コルまでは順調に行けたが、そこから猛烈に風強く止まり止まり行く。ちょっとした岩場やピークを3人ザイルを出してはしまいと手間どり、後からきたパーティーに追いつかれる。剣の頂上に不気味な暗雲たれこめだし、約1時間後吹雪となりあたりは暗くなりだすしテントなどはれる所など見当たらないし、イヤな感じになって

きた。もう近いはずの唐松小屋もまだかなりあるのではないかと案じられ、話し合い岩の斜面にビバークする事にした。暗やみの中で風は諸に吹きつけてくるし、信州側は切れおちているしテントをザックから出し中に入り込むのにも一苦勞した。アイゼンをはいたままシュラフの中に入りテントを低く低くおさえつける。テントを吹き飛ばされるのではないかという耐えられない恐怖に打ち負かされ悪夢のごとき夜になる。

12/30 風雪

発8:30~唐松小屋9:45

テントをたたむが先の状態を案じ岩に固定し放棄する。岩場となり2Pザイルを出し慎重に登る。急斜面をトラバースして行くと平地となり小屋はすぐそこだった。ほっとした。昨日の先行パーティーが心配しており温かいミルクをくれた。一服し渡辺、森下でテントを回収に行く。

12/31 晴強風

風強く唐松岳往復をやめ下山とする。小屋の裏へ出て4、5歩も歩くと風強く^が壁のごとく横ばいにはって行くも吹き飛ばされそうになり、早々に小屋に戻り下山を諦める。テントをはりなおす。

1/1 晴

発6:45~7:05頂上7:35~7:45小屋9:15~兎平11:45

1976年唐松岳一番最初の登山者になる。御来光に少し遅れる。下山は信州側の最初が少し急で慎重に下りる。不埒の東壁を眺めながら、だだ広い八方尾根を下りると、そこはもうスキー独占の世界だった。
(森下記)

〔76・3〕 剣岳 早月尾根

参加者：渡辺、森下、中尾

3/15~22

馬場島への道を黙々といくと、ニードルを積みあげたような見事な小窓尾根が手に取るように見えだしてきた。これが剣かと僕は唸った。

11月に吉田、久米が車で馬場島に荷上げをすますが、久米が退会し吉田さんが都合で行けなくなり結局3人パーティーとなった。8日間の計画で剣をアタックする計画だ。2日目で順調に2200m伝蔵小屋地点に入る。そしてそれが最後の晴天になった。以後5日間吹雪が続きテントが埋まり夜中雪はらいをさせられる羽目になる。しかし積もる所をつくるために雪をかきわけているように思えてきて、後は積もるに委す。小康状態の時、アタック試みるも2600mより先に行けず。6日目も雪で苦勞してテントを掘りおこし下山するが雪深く進めず、ザックを置いてラッセルし登り直して下りるようなしまつだった。下山途中より天気はもち直してきて、雪煙あげる赤谷尾根、小窓尾根が陽光を浴びまぶしい。馬場島の山荘で御馳走になり、

雪の取り除けられ途中まで入ってもらったタクシーへと急ぐと、寒そうにポケットに手を入れた運転手が待っていた。(森下記)

1976年度

[76・6] 谷川岳オジカ沢・一ノ倉沢

参加者：森下、中尾、松本

6/17

谷川温泉22:10～二股23:55

6/18

発6:10～大滝下10:03～捲いて出た沢13:20～中ゴ-尾根17:17～マチガ沢出合23:45

雨のそぼ降る中出発する。何を間違えてかヒツゴ-沢に入ってしまったあわてて引き返す。雪がかなり残っている。沢を忠実にと来たが、滝壺や狭い沢の中に、雪のブロックがゴロゴロしているので仕方なく魚止の滝より捲いて行った。季節的に中途半端な時きたためか、以後ある所では沢沿いに行け、ある所では雪渓を登らされ、他の所ではブロックが沢に詰まっており、ぬるぬるした草付を下に見える沢横目にこわごわトラバースして行く羽目になった。雪渓を行くと、突然大滝が目の中に飛び込んできた。途方もないベルクシュルンドになっていて、近づく気がしない。左岸を大きく捲いて行ったが、余程大きく捲きすぎたらしく、3時間の苦闘の末ある沢に出た事は出たが、時々見え隠れする幕岩Aフェンス北壁らしき下に、本流らしき物が小さく見える事になった。今更戻れず、適当に滝もある沢を詰めると三つ股となった。風になびく緑の国境稜線も近く見え、これがオジカ沢ではないかこの時は勘繰りもしたがそういう事はあるまい。右側のを行くが、これ岩場あり滝ありで、垂直に近い草付を青くなって登らされるようになっては、放棄して左岸をやみくもに登っていった。ひょっこり中ゴ-尾根に出た。重い足を肩の小屋まで運び、西黒尾根おろるも、懐電もつかずまだかまだかと足さぐりで降りる。旧道に出た時は、3人ともアスファルトの上にドサッとひっくりかえってしまった。

6/19

昼ごろ滝沢を偵察に行く。滝沢直下は急でアイゼンをつける。

6/20

発4:45～6:35南稜テラス8:30～終了点12:30～一ノ倉沢岳14:25～肩の小屋15:20～帰幕16:40

今日は南稜へ3人で出かけた。休日のためか、非常に混んでいた。一ノ倉尾根を登り谷川を踏んで帰る。松本下山。

6/21

滝沢下部ダイレクトー本流-Dルンゼ(?) 出発前、下部さえ登れば後はチョイチョイだとたかをくくっていたが、本流はかなり手強った。Dルンゼも2ピッチほど岩登りをさせられ好ルートだと思った。(森下記)

[76・7~8] 黒羅川北又谷より後立山縦走

人跡未踏の地、そこまでいなくても山の原初の姿に接する事のできるような登山、自分たちの力で一つ一つの問題を処理していくような登山、そういう登山を我々はしたかった。それに、この北又谷には色々の文章の中で最高の美辞が献上されていた。話は決まったようなものだった。美しいという所に誰が行こうとしないだろう。

参加者：森下、中尾、遠藤彰、松本、角田

7/26 晴

北又小屋9:40~長瀬12:25~幕営地17:10

日本海に面した泊の駅に降り立つ。ひんやりした朝の空気が快い。バスとトラック乗り継ぎ峠を越え少し歩くと北又小屋だった。小屋の先の橋より北又谷に入り、長瀬までは川沿いに順調に行けた。長瀬は水を満々とたたえた幅5mほど長さ100m程の魅力的な瀧だが兩岸が壁で行けず、捲く。左岸のがれたルンゼ状を登るが土壁が出てきてザイル出し越えると、樹木の密生した窪地に着いた。谷への下降点探しながら行くが、降りるに降りられず木の枝かきわけではかいくぐりながらえんえんと歩く。途中ちょっとした窪地にボンポンをはる。随分来た感じもするが、距離的には殆ど来てないようだ。夜雨が降る。

7/27 晴

発7:15~恵振平終8:45~恵振谷出合9:40~長尾谷17:35~幕営地19:05

幕営地より少し登り、急斜面を笹につかまりながら登ると小屋根上に出、前方に恵振平を認めた。小沢を2、3本横切り、やっとの事で恵振平に着く。下生え少なく歩きやすく、大木がうっそうと茂りかなり広い。原始の山をひしひしと感じさせられる所だ。未完成な沢というが泥の溜みを幾つか越えると、さしもの恵振谷へお入る。北又谷には大きな釜をもった又右衛門の滝が、U字形に削られた花崗岩壁より滔滔と流れ落ちすばらしい。ここも左岸の岩溝を2Pザイル出し熊平めざすが、それらしき所認められずかといって沢身にも近づけず、ランチの時間も惜んでひたすらヤブを扱ぎに扱ぎまくる。位置の確認できず不安にかられる。薄暗くなって白い岩床の沢に出て長尾谷を確認する。北又谷へ滝となって落ちる横をアブサイレンで降りる。ちょっと行った河原で幕営。星が話しかけてくるような夜だ。

7/28 快晴

発7:10~9:05中瀬12:20~大きな淵15:15~サンコ平16:05

谷を行くと大きな釜もつ滝あり少し捲き戻る。中瀬となり、日のサンサンと照り返すなか水

の中をジャボジャボ行くのはとても気持がよい。壁を40mへつる事になり、森下先行するも、ザックを水流に逆らって引きあげるのに消耗してしまい、ヘルメットをザイルの先に付け返し、一人ひとり荷をしょわせてへつらせる。中には途中で落っこちて、20m程沢の中アップアップして戻っていった桃太郎さんもいた。ここよりエメラルドグリーンに輝くとても気分のよい300m程の瀑が続く。左岸にバンド状に続く岩棚あり楽しくつたわっていく。谷は河原状となり左右に3つ程小沢を入れると突然大きな淵となった。2尺は優にあるイワナが泳いでいた。右岸スラブで行けず高捲く。途中、すさまじい水量と水しぶき上げる滝認める。すると谷は2分された。40mの懸垂で谷に下り両方の谷を偵察する。左の谷に廊下を確認し、漏斗谷出合としか考えられないと自信なく判断し（左岸に入る白金谷を確認できず迷った。）水ボリ詰めて上の窪地に戻る。ではここはサンコ平（広くない）という事になり、昨日までの谷を捲いた時の遅々たる進み方と、今日谷沿いに来た時のはかどり方の違いに唖然とする。木に何か字がほりつけてあり、今まで人跡を認めなかった我々は、遠い昔ここに人がいたのかと励まされた。ラジウスの不調でみじめな思いをする。

7/29 快晴

発7:20～廊下状の浄8:10～黒岩谷出合16:30

谷に降り廊下に対面する。昨日は気付かなかったボルトを見つけ、アブミに乗り岩棚にずり上る。100m程のきれいな廊下を抜けると巨大な雪のブロックが谷を塞ぎ、左岸の草付壁にザイルをのばす。長持淵らしきをはるか下に見おろし高捲きが続ける。淵の終りあたりに草につかまりつかまりしており昼飯を食べる。高捲きで汗をかいた身体にはひんやりした沢身はなんと気分がよい。これより100m程の巨大なスノーブリッジが2つ続けてあり、こわごわ下を走り抜ける。河原を暫く行くと直径が100mぐらいありそうな釜を持つ滝が現われ左岸を捲くが降りるに苦勞し、ボルトを打とうとするがキリが折れてしまう。急な草付が思う程の事なく降りれ苦笑する。へつりを続けて行くと左岸より黒岩谷らしきを入れる。北又谷の先を偵察しに行くと、荘厳としか言いようのない猿ヶ滝が、まわりの静寂の中ひとり水を落としていた。先のが黒岩谷と確認でき出合に幕営する。松本張り切ってイワナ釣に挑戦するも収穫なし。彼のいうには肝心の魚がいないとの事だそうだ。

7/30 快晴

発6:45～10:50黒岩平12:20～アヤマ平13:55～朝日岳16:40

どこか丹沢の沢登りをしているような快適な黒岩谷を詰める。非常にトンボが多い。急なナメ滝を越して行くと、いい目標になる大岩が右岸にある。さすがに源流らしくなり木々の枝や蔓が沢をふさぎうるさい。沢は多くの小沢と分かれていき蔓をかきわけて行く。まだかまだかと気は黒岩平にあせるが沢は木々の中を続く。黒岩平は突然あらわれた。一瞬言葉がなかった。広々と緑の湿地性草原が広がり、細い水の流れがかわいらしくそこここを流れている。ミズバショウ、シモツケソウ、アヤナが咲いている。さながら桃源郷かメルヘンヴィーゼと言った所

だ。お世話になったわらじをぬぎ、快い陽射しの中安眠をむさぼりたかったがまだまだお先が
ござる。北又谷は終わった。長かったようで短かったようでもある。これからは鹿島槍まで縦走
だ。杵池新道をアヤナ平、長杵山こえ朝日岳手前の幕場までてくてこ歩く。田吾作連が山の中
の雑踏地にひょっこら出てきたという感じだ。

7/31 快晴

発5:30～雪倉岳8:40～白馬岳12:10～天狗平16:10

白馬岳はもう町と言うべきだ。今日は雪倉岳、白馬岳を越え天狗山荘の幕場まで縦走した。

8/1 晴のち曇

発6:50～唐松岳10:05～五竜小屋12:50

大下りを下り、不帰を観察しながら人の列の中を行く。五月など不帰で合宿でもすれば垢抜
けしてなくていいんじゃないかと思う。唐松より、行く先の遠く見て重い足を五竜へと向かわ
せる。冬山でビバークした所がわかりあの日がまさまざと思いうかぶ。入山より快晴の天気は
下り出し五竜小屋前に暮る。霧深く小雨が降り出す。

8/2 大雨

強い雨で、五竜鹿島は断念し全然ロマンチックでない雨の遠見屋根を下りる。休息所などの
汚さは目をふさぐばかりだ。冬のゴミもかなりあると思うが、どうにかならないかと思う。泥
の海となったスキー場より、キャビンに乗り下り神城に出る。松本に出て精力をつけ定着用の
食糧等を買出しし、ふろに入り身の垢をおとしさっぱりした気分で思誠寮の畳の上に身をのば
す。

8/3 曇

島々よりいつもの如くバスに乗り込むが、釜トンネルを抜けた所で落石あり、運転手は少し
ちゅうちょした後、Let's go でいってしまった。

8/4 晴

山野さん、東野を待ち溜沢をめざす。東野体調悪く、登りで突然あわをふいて倒れる。しば
らくすると気がつき、何とか溜沢まで自分で登れた。 (森下記)

〔76・12〕 冬山合宿 燕岳～常念岳

参加者：渡辺、中尾、遠藤彰、松本、世利

12/28

官城7:30～中房温泉12:40

計画では、表銀座から槍へ縦走する予定だったが、リーダーの森下さんが風邪で不参加とな
り、大天井から櫛にぬけることになった。

中房温泉は、地熱のため、雪がとけ土が見えている所すらある。そのため、夜はシュラフで
は暑いくらいであった。

12/29

発7:15～合戦小屋12:00～燕山荘14:05

樹林帯をひたすら登り続ける。独標からは燕山荘はすぐの所に見えるのだが、意外に1時間以上かかる。

12/30 停滞

12/31

発8:25～蛙岩9:00～切通岩11:50～大天井岳13:10

天気はあまりよくないが、思いきって出発する。蛙岩は、ザイルをfixしたため、通過に1時間程かかる。後のパーティーは、少し手前から右へ下り、大きくまいていた。時間的にもその方がずっと早い。大天井へは、夏道は左へまいているが、この斜面は雪崩が出るというので、そのまままっすぐ上る。次第に急になるが、ガスで下がみえないのとアイゼンがよくきくので、恐怖心はあまりない。大天井で天幕を張っていると、夏道どうしにトラバースしていた人が二人落ちたと言うので渡辺さん、中尾さんが救助へ向かう。幸い、怪我は自力で歩ける程度で、6時頃帰ってくる。

1/1

発8:45～常念小屋11:10～常念岳13:15～幕营地14:45

山の上での初日の出は残念ながら、くもっていて見られなかった。常念小屋にいたパーティーに声をかけると、女性だったので驚く。目出帽とヤッケの完全武装なので、男か女かわからない。前常念から下ると言うが、研究不足で、そんな道があることさえ知らなかった。2512ピークの手前に幕営する。

1/2

発8:30～蝶ヶ岳11:00～横尾13:20～上高地16:40

太陽は顔を出したが、風はさらに強くなる。風に飛ばされた雪が、太陽のまわりでキラキラ光る。蝶はだだっ広く、強風が吹きぬけ、体が飛ばされそうになる。徳沢園で平野さんに会う。

1/3

発7:40～釜トンネル9:10～沢渡11:00

真っ暗で、しかも所々路面が凍っているというスリルいっぱいのトンネルを楽しみつつ下る。

(松本記)

[77・2～3] 五竜岳～鹿島槍ヶ岳

参加者：森下、中尾、遠藤、松本、世利

2/28 晴

テレキャビン山頂駅9:20～小遠見11:37～大遠見14:00

テレキャビンを降り、楽しそうなスキーヤーを横目に登り出す。天気は上々。どんどん近づ

く五竜、鹿島槍はまったくすばらしくあきさせない。

3/1 うすぐもり

発6:30~五竜小屋9:10

去年の雪庇の事故の場所などを聞きながら進む。道はきれいにできており、白岳の登りも問題なく五竜小屋へ。まだ早い。この先はキレット小屋まで暮営地はない。

3/2 くもりのち雪

発6:30~五竜岳9:25~G5 10:34~キレット小屋14:20

リーダーが天気を見にテントから出ていってなかなか帰ってこない。空を見上げて思案しているのだろうか。天気図はいつ崩れ出してもおかしくないことを示している。結局出発に決定。全員、緊張の面持ちで小屋を出る。

五竜まで、ほほ夏道どおりに進む。かなり急な斜面が続き、用心のため途中一か所ザイルを張る。頂上にはちょっと寄っただけで先へ。なにしろ時間との勝負だ。雪はあまりついていず、夏道がほとんど出ている。11:40今まで見えていた剣、立山の頂上に雲がかかり見えなくなる。それから15分後には雪が舞い始め、1時間後にはすぐ後の五竜も見えなくなり、本格的に降り出す。気はあせるがピークが次から次へと現われ、何度もだまされる。最後、黒部側の急斜面のトラバースをおえ、小屋についたときは、つかまらずにすんだとほっとする。冬期小屋の入口がわからず、風下の屋根の上にテントを張る。

3/3 吹雪 停滞

ラジオによると、この冬二番目の寒波が来ており、東京でも雪が降ったという。こちらは春山のつもりできているのにと文句が出るが、この時期じゃ、仕方があるまい。

3/4 吹雪 停滞

3/5 吹雪

発7:50~キレット9:25~北峰直下退却13:00~暮営13:30

今日は天気は回復に向かうはずとの判断から、行動に出る。風はいくぶん弱まった感じはするが、気温はマイナス25度と依然として低い。小屋から稜線を忠実にたどっていくと、アブザイレン用のしっかりとしたピンがあった。これで、キレットの最低部に降りる。信州側の壁には、大きな雪がもこもここといった感じでついており、これがキノコ雪というやつだろう。キレットから、黒部側へ急な壁を1Pまわりこむと、傾斜はゆるくなる。依然として吹雪いており、まつ毛が凍りつき、前がほとんど見えなくなる。夏道は途中から吊尾根へトラバースするのだが、その開始点がよくわからないまま、どんどん登っていくと40mほどの岩場に出る。おそらく、すぐ上は北峰の直上だろう。左側は北壁ですっぱり切れ落ちている。凍ってワイヤーといったほうがふさわしいザイルを取り出し、森下さんが取り付く。しかし、悪いらしく、結局あきらめ、引き返すことにする。目はよく見えず、足元はガレていて不安定で急な下りときては、まったくいい気持はしない。途中、小さな平坦地を見つけ、雪庇がないことを確かめ

てから北壁側を削り広げ、どうにかテントを張る。

中にもぐり込み、手袋を取って驚いた。遠藤さんと森下さんはほとんど全部の手の指、他の人も数本の指の先が白く凍っているのだ。中には、黒くなりかけているものもある。これは大変と、急いでお湯をわかし指を解かす。本には40℃ぐらいとあるが、とてもそんな熱いお湯にはつけられない。ぬるま湯でも、かなりの痛さだ。もっとも、これが痛くないようだと、もうどうしようもないのだが。

3/6 吹雪のちくもり時々晴

発11:35～吊尾根11:55～南峰12:45～冷池小屋14:25～鹿島19:00朝、相変らず吹雪。最終下山日まで下りるのは無理と、食いのばしの検討に入る。ところが10時頃、外へ出た遠藤さんが、青空が見えると叫ぶ。この機会に少しでも進んでおこうと、それから大急ぎで撤収する。少し下ると夏道が出ており、そこからトラバースして難無く吊尾根へ。南峰を越えたあたりから太陽も顔を出す。そのまま、一気に駆け下り、真暗な中、鹿島部落に着く。

かなり後になって、僕らが歩いて降りてきた北俣の雪溪のまさにその下に、この正月に東尾根などで遭難した数人の人達の遺体が眠っていたことを知る。あらためて、冬山の恐ろしさと、僕等がいかにか好運であったかを思い知らされた。(松本記)

1977年度

[77・4] 新人合宿 谷川岳

参加者：川田、上遠野、山野、伊東、水口、入戸野、吉田、森下、久米、中尾、遠藤彰、松本、伊東、遠藤信行、青谷、中野

4/29 雨時々みぞれ

登山指導センター4:40～5:20一ノ倉沢9:40～10:00幽ノ沢(雪訓)15:40～15:55帰幕

上遠野さんの車で土合につくと、雨が降っている。明るくなるまで車の中にいたかったが、すげなく追い出される。6時頃高校生が元気にやってくる。天候の回復を持ち、幽ノ沢へ。高校生にはすぐに訓練をやらせるが、我々の方は討論会になってしまう。

4/30 晴

発8:25～8:45テールリッジ10:05中央稜下10:50～12:20一ノ沢出合付近(L, 雪訓)15:45～15:55帰幕

テールリッジを登る。去年、びびった所をトップで簡単に行け、一年の進歩を感じうれしくなる。昨日の雪で白くなった滝沢スラブがすばらしい。中央稜の下で、大きな自然落石を見て、